

①「町宿給銀」 当時各浦々の用件のため、城下町に出で来た時の不便と少なくするために、相談して定めていた町宿に對する謝礼を、藩庁から支給して貰つていたものと考へる。

その給銀は、その浦々から藩庁に送る運上銀の中から控除するような方式をとつていたようである。

明治時代になつても、この町宿はまだ残つていた。浦前から来る舟着場に近い船頭町の浜丁あたりには、羽出宿、中越宿、舟宿などという家があちこちにあった。

これは亦々宿の類ではなく、普通の町家であつた。浦々から城下町に出る来客が一時休息したり、荷物を預けたり、時には泊めてもらうこともあつたであらう。

明治年代には、表、甘藷などを新落から贈つていたようであつたが、明治二十五年頃以降無くなつたように思ふ。

②「皆令」 時には「間閣」とも書いてある。庄屋さんの書き役をしていた人であり、庵寺の僧又は神社の堂守の如き身分の人が當つていたのではないかと考へられる。(おわり)

尚序で佐伯史談第七十五号に掲載する筈の延、敏而の都合から割愛した。田畑永代売禁令を犯した時の処分を左に追記します。

### 田畑永代売御仕置

- 一、売主、牢舎の上追放。本人死に候時は子同罪。
- 一、買主、過急牢。本人死に候時は子同罪。但し、買戻田畑は売主の御代官又は地頭へ之を取上ぐ。
- 一、証人、過急牢。本人死に候時は子に構ひなし。
- 一、貸取取り候者、作り取にして、貸に置き候者より年貢後相勤め候得ば、永代売同罪の御仕置。但し、親類

（雙）という。

古之通田畑永代売停止の旨被ニ仰出ニ候。

寛永二十年の田畑永代売禁令から、八十年経つた吉宗の時代には、この禁令も有名無実になつていた。売買は出来なかつたが貸入れの形式は認められていたから、貸流ししてしまふと結局売買とおなじで、田畑の移動兼併は行われていたことである。

(以上)

### 研究

梅牟礼城の作事について

一 中世山城の構築についての考察

会員 小野 英 治

中世の山城である梅牟礼城の作事、つまり建築物方面の事については、現在これを知ることが非常に困難である。

梅牟礼城址の現状では、石垣や礎石と覺しきもの等全く残してないし、当時の絵圖(城郭と主とした)、あるいは城郭の模様を伝える古文書等もないから、往時の姿を知る事が不可能視される。

しかし、はたして佐伯氏時代は於ける、梅牟礼城の復元が不可能であらうか。私は次のような事から、ある程度の復元が出来ないのでないかと考へている。

日本の中世城郭には、いろいろと類似点があり、ほぼ同時代の他の城郭絵圖、文獻、梅牟礼実録等より一応参考資料となるし、さらに現況、発掘等によつても、概略当

時の城郭の模様が想像、推測されよう。

例えは、添考となる中世城郭図として、長孫合戦圖（徳川美術館蔵）中世城天守蔵、やや時代が上るが、後三年合戦餘巻に所載國等がある。

梅牟礼実録では「櫓の物見窓」「木戸」「櫓」「櫓の板」「矢狭」「セリ板口」等々、城郭用語が出てくる。

中世城址に石垣の無いのは、慶長年間、毛利高政が佐伯城の築城に際して運搬、これを使用したためであるといふのが定説となつてゐるが、私はこの点にささやかな疑問をもつてゐる。中世の山城は概して石垣が用いられてゐたのが普通であつた。

自然の地形を最大限に利用したからであるが、近世城郭に見るような永久的なものでないから、山頂を削り取り、峯を掘り切る等の土木工事で事足りたためである。建築物もその重要視してなく、堀立小屋が多かつた。

堀も矢狭間等開けられていたが、それも今日我々が見るところの近世城郭にある、白塗籠の立派なものでなく、荒塗の下地のままの堀で、その屋根も板、又はワラぶきといふ簡素なものであつたようだ。だからその遺址が近世城郭の佐伯城に比して、驚ろく程相違してゐるのである。むしろ城内の建物は、殆んど板ぶきや草ぶきで、瓦屋根はなかつたようである。

では梅牟礼城の石垣が、佐伯城に運搬、使用されたとする伝説はどのような事かというところ、私は梅牟礼城を破却し佐伯城を築いたといふところより、誤まり伝えられたものでないかと思ふ。それは旧領主の遺物（城郭）はすべて壊し、運び去つてしまつたといふ領主の交代を領民に意識的に知らせるといつた、新領主の故意宣伝の意味もあつたものだらう。



大体こんなものであつたらう。永久的築城でなく、臨時城郭的なもので、居館は山麓にあつたから、簡素な城郭であつたと言ふと思ふ。

城址より発掘された水カメ片や石臼等は、籠城に於ける食糧確保の位置が知られる。二ノ丸の土壇により建物の基礎？の位置が推測される。以上の事から私なりに、上掲のような梅牟礼城復元図が出来た。今後、調査研究によって、何れかいろいと変更されることにも思われるが、佐伯氏時代の梅牟礼城の模様が、

参考文献  
日本城郭考（古川重春著）  
日本城郭史（鳥羽玉雄共著）  
城 知恵と工夫の足跡（伊藤くじ子著）  
戦国武家事典（稲垣史生編）